## 慶應義塾大学理工学部體育會75年史の刊行によせて

慶應義塾長　清家 篤

理工学部創立75年にあたる年に「慶應義塾大学理工学部體育會75年史」が発刊されますこと、まことにおめでとうございます。

これまでまとまったものがなかった理工学部体育会の歴史がはじめて一つの冊子となりました。理工学部体育会にかかわられたお一人おひとりの青春や思い出がぎっしりとつまった懐かしい一冊となるだけでなく、歴史資料としても貴重なものとなるに違いありません。

なにより本誌の完成には、宮﨑吾郎理工学部体育会先輩団体連合会会長をはじめ塾に対して熱い思いをもってくださっている皆様のご尽力によるところが大きいことに感謝申し上げます。移転を繰り返してきた理工学部は、散逸してしまった資料が少なくなく、従ってこの年史の作成には、まず情報や資料の収集からはじめる必要がありました。先輩方のところに直接足を運んで個人で所有する資料を閲覧する、あるいは先輩方と直接対話をしながら往年の記憶を辿っていただく、といった地道で根気のいる作業を積み重ねてこられたと伺っております。心から敬意を表する次第です。

さて、谷村豊太郎初代工学部長は「すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなる」とおっしゃったといわれていますが、このことからもわかるように慶應義塾大学の理工学部は、その時々の社会の要請に直接結びつくような専門的な知識や能力のみを追い求める専門一辺倒ではなく、幅広い視野を持つことを重視し、理工系に携わる塾生にとって生涯の指針を与えるような教育を重視してきました。

大学がなすべき最良のことは、けして陳腐化することのない能力を塾生に身につけてもらうことです。文理融合という点では、慶應では理科系学部の塾生には社会科学や人文科学を十分に勉強してもらい、一方文科系学部の塾生にも実験を伴う自然科学の授業をしっかりと受講してもらっています。深い専門教育と同時に、文理融合の幅広い学問教養を身につけてもらうことがきわめて重要だと考えているからです。

さらに、小金井開校時に丹羽重光工学部長が「技術者は体力がもっとも必要

である」とおっしゃったように、理工体の活動を含め課外活動を存分に行うこともきわめて大切です。それは健康な体をつくるということもありますが、同時にスポーツもまた自分の頭で考える能力を身につけることのできる場だということです。次の試合に勝つといった課題を見つけ、その課題を克服するためにはどのように技や戦術を磨けばよいかを考え、それを練習で試して確認し、最終的に勝利に結びつける。これは問題を発見し、その問題がなぜ起きているのかについての仮説を構築し、その仮説が正しいかどうかを検証し、正しいと確認できたらその考えにもとづいて問題を解決するという科学の方法論につながります。スポーツもまた学問なのです。スポーツはどんな仕事においても求められる自分の頭で考える能力を磨く機会でもあるのです。

大学に学ぶ学生の本分である学問をしっかりと行い、また課外活動も存分にエンジョイして、自分の頭で考える力を養うことを目指すのが慶應義塾の教育です。そうした意味において本書は、理工学部体育会の原点・源流がどのようなものだったのか、そこから刻まれてきた足跡をたどり、集められたさまざまな断片を一つの大きな流れとすることで、理工学部体育会の意義を高らかに示す貴重な一冊です。